

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	巽 昌子 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	日本中世社会における相続と文書-「処分状」の役割に着目して-	本論文は、相続関連の文書の変遷をたどることによって中世における相続形態の変化、さらには社会そのものの変化に迫ったものである。日本の中世社会では、相続に際していくつかの様式の文書が用いられたが、個々の文書様式の性格や役割は、必ずしも詳細には検討されてこなかった。本論文では、これまで「譲状」と同一視されてきた「処分状」の固有の役割に注目し、そのうえに立って当該期の相続のあり方が追究された。
審査委員	(主査) 教授 安田 次郎	前半ではまず「処分状」固有の役割を解明したうえで、五摂家のひとつである九条家の相続が検討され、南北朝期から室町期にかけて九条家の相続において「処分状」が変化し激減する背景として、一条家の分立や諸子分割相続から嫡子単独相続への変化・移行があったこと、ついで「家」相続のあり方と相続に際して使用される文書の関係が明らかにされた。
	教授 古瀬 奈津子	後半では「第二の貴族社会」ともいわれる寺院社会の相続が取り上げられ、醍醐寺報恩院の坊から院家への発展、同院の寺内における地位の確立などが相続を軸として検討され、そのうえで醍醐寺の院家の相続のあり方とそこで使用された文書の関係が解明された。その結果、「譲状」と並んで「付法状」が重要な文書としてあぶりだされ、「付法状」を軸として寺院社会のあり方、相続の特徴などが明らかにされた。
	教授 浅田 徹	日本中世の相続をめぐっては、法制史、家族史、女性史、荘園史などの分野で多くの研究が蓄積されてきたが、本研究はそれらの研究を参照しながらも古文書学的なアプローチから研究を大きく前進させたものとして、また前近代社会におけるさまざまな社会や集団を相続という視点から捉え直す可能性を示したものとして評価できる。
	教授 新井 由紀夫	審査では研究史の整理・把握、説話史料の解釈・位置づけ、備えられているべき図表の不足、一部の文章の混乱などについて委員から若干の指摘がなされ、それに応じて適切な修正が行われた。公開発表会での発表、質疑応答なども適確であった。
	教授 神田 由築	以上から、本審査委員会は、本論文を博士論文としての水準に十分に達しており、博士（人文科学）、Ph.D. in Japanese History の学位に値すると判断した。
インターネット公表	<div><div><div>○ 学位論文の全文公表の可否（可・<input checked="" type="radio"/>否）</div><div>○ 「否」の場合の理由</div><div><div>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</div><div>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</div><div>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</div><div><input checked="" type="radio"/>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</div><div>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</div></div></div></div> <div>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</div>	